

【2015年文化の越境とジェンダー国際シンポジウム in 上海 研究発表 要旨】

子どもの本とジェンダー表象
——近年の絵本を中心に

谷口秀子

絵本やアニメを通して世界中で親しまれている『シンデレラ』や『白雪姫』をはじめとするおとぎ話の多くに、因襲的な女性像・男性像やステレオタイプの性役割が見られることはすでに周知のことである。Colette Dowling は、*The Cinderella Complex: Women's Hidden Fear of Independence* (1981) において、幼少時に接する因襲的なおとぎ話のジェンダーの刷り込みが、成人後も女性を意識の根底で支配し依存願望を植え付けているとして、幼い時に子どもに繰り返し与えられるおとぎ話に潜むジェンダーの影響力の大きさを訴えている。

伝統的なおとぎ話に限らず、現代の子ども向けの作品においても、以前ほど露骨な例は少なくなつたとは言え、いまだに因襲的な女性像・男性像とステレオタイプの性役割などのジェンダーが見られることも、事実である。そして、Dowling が指摘したおとぎ話の場合と同様、そのようなジェンダーを含んだ絵本や読み物などが、まだ十分な知識と批判能力を備えていない幼い子どもたちに因襲的なジェンダーを刷り込み、ジェンダーを再生産する可能性は、少なくない。その意味で、幼い子ども向けの作品におけるジェンダー表象は、きわめて重要な問題であると言える。

本発表では、近年の子どもの絵本などを対象に、作品に見られる女性像・男性像、および性役割や性別役割分業などを中心としたジェンダー表象について考察した。そして、そのようなジェンダー表象が、作品の受け手である子どもに対して発する隠れたメッセージやその影響についても論じた。

(たにぐち ひでこ・九州大学教授)